

第 23 話<天岩戸神社>の要約と参考資料

第 23 話<天岩戸神社>の要約

近年、観光客で大賑わいの天岩戸神社は、江戸中期までまったく知られていない場所でした。江戸後期に有名になるのに、幕府の旗本から延岡藩に雇われた服部伝兵衛の力が大きかったのです。服部は、銀山奉行酒井五左衛門を補佐する外録の役所に勤める役人でした。

第 23 話<天岩戸神社>の参考資料

2 3 - 1 天岩戸神社の歴史

Wikipedia 「天岩戸神社」より

東西両本宮は元来は独立した別の社であった。ともに皇祖神天照大神を祀るとはいえ、創祀以来皇室や朝廷からではなく、在地住民からの信仰を主としている。

<天岩戸神社西本宮>

天岩戸神社西本宮は創祀の時代を詳かにしないものの、岩窟（天岩戸）を神体とするのは、古くからの信仰形態を示すものであるとされる。社伝によれば、瓊瓊杵尊が天岩戸の故事を偲び、その古跡に鎮祭したのが起源であり、弘仁 3 年（812 年）に大神惟基によって再興されたが、戦国時代にたびたび焼失したという。元禄 4（1691）年にまとめられた寺社明細記録『高千穂旧記』には「天ノ岩戸」についての記述の中に「拝殿有、四方見通に建たり、前ニ鳥居有」とあるのみで神社としては記載されておらず、簡素な遥拝所としての造りであったと考えられる。その後棟札によると、宝永 4 年（1707 年）に荒廃した社地を整地し、文政 4 年（1821 年）には延岡藩主の援助で社殿を再建したという。天保 8 年（1837 年）にこの地を訪れた松浦武四郎が紀行文（『西海雑志』）に記した「道の傍に二間に四間の遥拝所あり」がそれを指していると考えられる。天保 12（1841）年にこの地を訪れた豊後の医師賀来飛霞はその紀行文（『南遊日記』）に、「殿アリ扁シテ（扁額に）天磐戸ト書ス」と記している。『日向地誌』でも、明治 4 年（1871 年）に「天磐戸神社」と改称されるまでの旧称は「天磐戸」（神社とは書かれていない）としている。明治 6 年（1873 年）村社に列し、同 30 年に社殿の造営が行われた。また明治 24 年に旧岩戸村の村社神楽尾神社、同 42 年に旧山裏村の杉園（杉ヶ越）神社や旧岩戸村の年神社など、明治以降近在の村社や無格社を合祀している。

2 3 - 2 江戸後期の天岩戸見学記

高千穂旧記（「高千穂町史 郷土史編」P361）

（「高千穂旧記」は元禄4年（1691）に記述された、信憑性の高い記録であることは、人々が崇めた神社・仏閣の明細帳であることでわかる）

岩戸村

一、天ノ岩戸 是ハ谷川の切岸也 大神宮此处ニこもり給ひし所のよし、只今木立茂り岩屋の様子不分、右谷川を隔てこなたに拝殿有、四方見通に建たり、前ニ鳥居有

高山彦九郎の高千穂巡拝（「高千穂町史」P192~196）

徳川時代の勤王の士の紀行文を引用するのは、彼が戦前の有名人でもあるが、その紀行文が当時の高千穂地方の交通や生活状態、伝説等を実に克明に描写しているからである。高山彦九郎は延享4年（1747年）上野の国の郷土の子に生まれ、鎌倉時代に小島法師が書いたといわれる「太平記」を読んで勤王の志を抱き、京都に出て中山愛親等の公家を訪れ、諸国の勤王の志士と交わった。（略）この高山彦九郎正之が高千穂に来たのは、久留米で自刃する1年前で、彼が45才の時であった。この紀行文は彦九郎自刃の時消失したと言われていたが、幸いに「筑紫日記」という記録で残っており、実にこまごまと今から180年前の高千穂地方の様子が書かれていて、参考になることが多い。

筑紫日記（寛政4年=1792年=7月12日~同年8月26日）

（1792年7月18日）荷物を神楽尾、良七所迄継かしめて、予は寅卯の方8丁下りて天岩戸へ来る、岩10丈斗り、前に川流る、口は乾に向ふ、木生ひ茂りて見へず。岩上の松、頃日九日暮時折れたりとて人々驚く、風雨もあらぬに奇也とす。川は笹の戸といひて、末市の下を流るゝ、かゝり戸の本川也。（略）峠を上る岩戸坂と号し、五ヶ村の二圃余の松をば灯籠の松と号す。天照太神籠らせ玉ひし御時に、灯火を立てたりし松也と伝ふ。

* 読点は川原

伊能忠敬の高千穂測量行（「高千穂町史」P196~198）

伊能忠敬が本県を測量したのは2回で、第1回は文化7年（1810年）で、1行16名が4月2日に大分から南下して、北浦、延岡、宮崎、飫肥と海岸線を南下し、第2回は2年後の文化9年（1812年）5月前の逆に南から山手に沿って本県に入り、野尻から2隊に分れ、本隊は、佐土原から延岡を経て高千穂に入り、河内から肥後阿蘇に出、豊後森に出ている。

（1812=文化9=年6月18日）朝より雨、或止又雨。六つ後宮水門出立、㊦印より初、同村波瀬川一野水門字八瀬川中十間深角川、七折峠、岩戸村、此村天照大神宮の岩戸あり先に出す。野方野門街道と岩戸本村追分迄測、二里二十一丁四十五間、岩戸村庄屋止宿、佐藤富弥、八つ七分頃に着其後も雨。

松浦武四郎の西海雑志（宮崎県史 別編「神話・伝承資料」P705）

＊伊勢国の探検家松浦武四郎（1822年～1888年）の西国旅行記

（1837＝天保8＝年）村を離れて二町ばかりの程桜を多く植ならべ、道の傍に二間に三間の遥拝所あり。百余間谷川を隔て向ふの岸は数十丈の岸壁屏風を建たる如く聳ち、其岩の面に天の磐戸イハトと名付る洞穴あるを此方の岸より遥拝するなり。密樹葉をかさねて少しの透間もなきゆへ、洞口はさだかに見定めがたし。また拝殿の中より斜に河下の方を見おろせば、水面をはなれて一筋の虹の如く石とも木ともわからねども橋の如くなるものあり。里人は是を号けて天の浮橋アヲと称す。こなたの岸にはするどき大岩水に臨みてさし出、其ひまには樹木萱笹いやが上に生ひ茂り、道を求るよしもなく其上切岸数丈なれば浮橋の辺へは翼なくては到りがたく、況や磐戸の辺へハ逆巻谷川石をマロバ転し、急湍の水勢山にひびきて音すさまじく渉るべき方便てだてなし。先年当国の者老人磐戸の有所を探らんとて、向ひの山上より手斧細引など用意して数十仞の絶壁を伝ひ下りたりしが、如何せしか其者終に帰らず。其後七、八年以前に奥州の六部一人、これも大胆の男にて磐戸の山上より綱にすがりて下りけるに、此者も同じく戻らず、夫よりは人々おそ懼れて向ひの山中へはうかつに立入者もなし。其節六部の所持せし笈おそを近村に預り置たるが今に残り有よし里人物語り。（略）

賀来飛霞かくひかの南遊日記（高千穂町史P204～205）

＊豊後国東郡高田（現在の分県豊後高田市）出身の本草学者。1816年2月27日～1894年3月10日。天保2年（1841年）の夏に高千穂を訪れた。

（1841＝天保12年＝8月22日）相別レテ延岡ニ至ント欲シ、村口ヲ出テ五、六町路傍石ヲ建テ、磐戸道ヲ表スルヲ見テ、頓ニ其地ニ至ンヲ欲シ、迂路ナレトモ左折シ、溪流ヲ右ニシ往三里許、磐戸ニ至ル。たまたま会々祭祀ニテ、遠近人來り群フ。殿アリ扁シテ天磐戸ト書ス。所謂磐戸ハ大溪ヲ隔テ、樹竹極テ繁茂鬱倉晦暝弁スヘカラス。前溪兩岸削立、其水面ニ至ル百尋許ニテ、碧潭アリ。上流下流共ニ磐戸ニ至ル道ナシ。いかだ筏シテ至ルモ、絶壁攀ツヘカラス。

是日郷人雑扮ヲナストイエドモ余其技ヲ觀ズ、官道ヲ問テ嶮阪ヲ下り板橋ヲ渡ル。亦水面ヲ距ル通シ。又嶮阪ヲ上レハ又祠アリ。鳥居アリ木皮削ラズ神代ノ遺風トモ謂ツベシ。土人ニ問ヘハ磐戸大明神ナリト、せきとう石磴ヲ登リテ、ぼうえん茅檐ノ祠アリ。祠中ニ二神神輿アリ。蓋村異ニテ別ニ祭ルカ、抑神ノ行幸スルトコロ乎、三里宮水ニ至ル。

樋口種実「高千穂神跡明細記」（宮崎県史 別編「神話・伝承資料」P465～486）

＊1863（文久3）年に延岡藩の国学者樋口種実が藩命によって高千穂の神跡を調査して記述したのが「高千穂神跡明細記」である。

かりそめの名所にあらず神の大御代の書籍代なり実録也、大らかに思ひなげがしまつりそいたしとし、或山臥此御窟を拝むとて立入たるに暫し出ずで、一日斗り立て出たるが、口つぐミて物いふことあたはずすべなくて、其住所におくり返しつるが、日あらずして死

たりといえり、かかるとあれハ恐れて近つくものなし、拝殿ハ川を隔てゝあり、こゝに神楽殿もあり、御宝殿もあり、此宝殿に入納たるは、此地引ける時、掘出したる種々の土器ともなり、齋ひへもあり、飯筒などもあり、石釘といふもあり、此地中をうめてハ、尚種々出るよしなれとも故なければ掘らず。

*読点は川原

23-3 幕末の外録銀山の繁栄

石川恒太郎「日向ものしり帳」(P167)

この鉾山(土呂久鉾山)は、その後、内藤氏の時代には、延岡藩で掘りました。これを御手山と申しました。御手山というのは藩の直営の山というわけであります。延岡藩では銀山奉行という役人を置いて、この鉾山の支配に当たらせ、各地から専門の技術者を雇い、さらに地元の人夫を集め、盛んにこれを掘ったのであります。

高千穂町史 P588～P590 より

土呂久鉾山の全盛時代は、森田三弥の経営時代と嘉永5年、6年頃の内藤藩の直営時代で嘉永6年には、藩主内藤能登守政義が自ら土路久鉾山を視察している。この内藤政義の土呂久視察は何分にも殿様直々の鉾山視察とあって、当時の庄屋、代官、^{べんざし}弁指は、8月13日殿様、外録銀山視察が内達されてから、11月26日の土呂久着迄何10回となく現地の下検分をし、大騒動している。

*弁指(べんざし):九州地方、とくに豊後・日向地方で庄屋を補佐する村役人。

400人余りのお供を連れて、殿様自身で視察した土呂久の繁栄振りがうかがえる。内藤藩ばかりでなく、幕府からも当時役人が派遣されている。江戸幕府の銀山奉行*酒井五左衛門、服部伝兵衛、遠山十兵衛等の役人が、はるばる江戸から、土呂久に派遣されて鉾山視察を行なっている。中でもこの中の服部伝兵衛は、其の後も岩戸に関連を持ち、明治維新には延岡藩に仕官して森弘と名を改めて、一番半隊長という職に任ぜられている。この服部伝兵衛等の肝入りで、天岩戸神社の名は江戸の花町に知れ渡り、江戸の高貴な方、人気役者、有名画家、吉原遊女の信仰を集め、沢山の寄進物が、これら鉾山関係者を通じて天岩戸神社に奉納され、岩戸神社の有名な織部^{おりべとうろう}燈籠といわれる饅頭型の石燈籠や、神楽殿の岩戸開きの額縁は、当時、江戸から寄進されたものである。

土呂久は為に時ならぬ賑いを見せ、多い時は5百戸から6百戸の世帯があり、二千人位の人が住んでいたという。

*「江戸表から延岡藩に招かれて銀山奉行になった」が正しい。

藤寺非宝撰「日向国臼杵郡高千穂特別記録文献資料第七」より

嘉永五年四月ヨリ天岩戸神社祭礼役割帳(岩戸村庄屋所)

一、天岩戸正遷宮

但、銀山方ヨリ寄附ニ而、宮修覆、神樂殿、御門廻廊、内玉垣、外玉垣、石垣等、新規出来。宮水役所江茂内達候処、寺社方江も御達上可然段御沙汰。田尻ヨリ書状相添、佐藤参河正、九月二日ヨリ御城下江被罷出、寺社下役衆江内達有之、御差支無之旨ニ而六日ニ被罷帰候。

メ右正遷宮ニ付、招請

田尻大隅正 喪中ニ付

名代 田崎淡路正

佐藤讃岐正

佐藤山河正

メ神樂共ニ惣人数六十人余也

右之外神事引受、庄屋、弁指、小触不殘罷出ル

諸奉公人衆不殘。

今日子供踊り有之為、取メ諸旅人吟味役郷足輕式人 御役所ヨリ御差配。御紋付丁ちん、半皮二ツ御渡被成候。

右遷宮ニ付銀山ヨリ

酒井五左衛門殿 上下四人

岡坂啓三郎殿

他ニ詰医師

河野元泰

角力取 友綱良助

右之通参詣、夕八ツ半頃出立ニ而御引取也

嘉永六年八月吉日 天岩戸江江戸ヨリ奉納品之品略記（世話方）

天岩戸大神宮へ奉納の品々、江戸にて服部氏（江戸旗本）の催集して、外録銀山へおくり給ひて、酒井氏より引渡されしをつぎつぎ記したる也。手拭は数千本を幾度にもおくれたれば、記すにいとまなくて写しませるぞおほかる。ただ大かたを記しおくになむ。

江戸六本木様 延岡中屋舗 殿之御養母住心院様也

一、御押絵一 御自作と云々

一、御初穂 金貳百匹

一、御手拭ニ 白二分銅形染入 中六本木奥

六本木奥女中ヨリ

一、手拭ニ 白二分銅形名染入 次々皆おなじ ひて

（以下 手拭ニまたは一 13人の女中名がつづく、略）

一、御神燈一 勇齋 国芳画 江戸西久保 萬屋傳七

中島貞八

御館入 大工 吉右衛門

(以下、大工 4 人、鳶 2 人、屋根方 1 人、左官 1 人、瓦師 1 人略)

- 一、同一 江戸東両国相生町 遠州屋嘉兵衛
水戸御国産蔵元 松田嘉造
- 一、同一 右兩人
- 一、同一 江戸 鉤屋利右衛門
- 一、同一 赤地 友綱良助
- 一、芝居幕 一帳 服部氏ヨリ
- 一、御本社神前鈴一 同
- 一、絹地発句 馬見原にてコシラへ神前ニ掛ル 同
- 一、絵一 神楽殿ニ掛ル 同
- 一、拝殿神前鈴一 嘉永六丑五月五日 江戸日本橋通二丁目
植木吉右衛門
- 一、短冊奉納 歌、発句、数百枚つぎつぎ奉納也。俗姓しらざれば、すべてしるさず。

一、天岩戸宮修覆

江戸 傳通院大鴨上人

同 村林治右衛門

右金五拾兩宛寄進ニ付、佐藤讚岐并庄屋土持靈太郎兩人ヨリ、金子請取書差出申候、宮殿修覆別帳アリ。

(右請取証案文 縦一尺 幅一尺四寸五分)

一、金五拾兩

右者天岩戸大神宮御修覆金書面之通、傳通院大鴨上人様ヨリ御寄附被成下難有奉請取候。依之御修覆金請取一札如件

白杵郡高千穂岩戸村庄屋 土持靈太郎 (黒印)

嘉永五子年十二月

村惣代 甲斐久之介

同 土持四郎吉

大神宮神主 佐藤讚岐

御銀山方御役所

手拭奉納

木綿一尺四寸斗、紋所、又家名などおもひおもひニ染入たり、畧しく写さず

(以下に、手拭いの本数と奉納者の名前がつづく)

嘉永七寅四月奉納

一、同 弍百五筋

それぞれに姓名染入たれども、事繁く、写すに違^{いとま}あらず、数ばかり記しおくになむ。(横縦 縦四寸二分 幅一尺一寸五分 二十八枚 内三枚余白)
(奉納者の名前入りの手拭いを縫い合わせて暖簾にしたものの写真が2枚ついている。その説明として)

江戸旗本服部伝兵衛天岩戸へ寄進ノモノト同ジモノ。村芝居ノ時コレヲノレンニ下ゲタルモノナリト。広サ2張トモ、一坪位。

23-4 銀山奉行になった酒井五左衛門の起請文

日之影町史 7 史料編 4 「内藤家文書」 P160~161

起請文前書

- 一、此度、銀山奉行被仰付、諸事御上御為筋第一ニ奉存、聊以、御後闇儀仕間鋪事
- 一、御家中其外奉対御上、悪心ヲ含候族有之候ハハ、早速可申立、勿論、一味同心仕間鋪候事
- 一、銀山奉行之儀者、金銅鉛錫山共兼勤ニ付、右山方御仕置之儀、及心之程精を入、私欲不仕、万事潔白ニ、御為能様可仕候事

(略)

嘉永五子年七月二十三日 酒井五左衛門

佐野太門殿

南 里見殿